

平成30年度「山形学」フォーラムが終了しました！

今年度の「山形学」フォーラムは、遊学館ホールを会場に「どっこい方言は生きている」と題して、基調講演の講師にNHK山形放送局シニアアナウンサーの柴田徹氏、パネルディスカッションのパネリストに弘前大学人文社会科学部教授の佐藤和之氏、元日本国語大辞典編集長の神永暁氏をお迎えし、「山形学」企画委員で跡見学園女子大学文学部准教授の加藤大鶴氏をコーディネーターにフォーラムを開催しました。

柴田氏は、「今夜はなまらナイト～こぼくささの裏側に～」と題し、2007年NHK山形局に在局当時に企画し7年間にわたり放送された番組「今夜はなまらナイト」について、番組誕生のきっかけや、方言で話す番組を作ろうとした理由を、実際に放送された番組の音声や映像を交えながらお話しくささいました。「自分にとって故郷とは山形とは、山形弁とは何だろう、と10代の時から考えていて、東京に日帰りで行くことなど無かった当時感じていた故郷への閉塞感と、様々な感情を伴った思い出の故郷山形を思うとき、その言葉は常に自分と共にあり、生まれた土地の養分を吸い上げ自らを形作っていくための「根っこ」となっている」と表現されました。

続くパネルディスカッション「方言のこれまでとこれから」は、佐藤氏と神永氏をパネリスト、柴田氏をコメンテーターとして行われました。

佐藤氏は、伝統的な方言は確かに薄まっているという調査結果を示しながら、「無くなるものにも残るものにも理由があり、また新しく作られていく方言があり、その地域らしさは残っていく。そして、一つだと思われている共通語も、実はそうではなく、仙台や札幌で使われている共通語と東京で使われている共通語はこの先も同じにはならない」ということもお話しくささいました。

神永氏は、「日本国語大辞典」という辞書編集に携わってきたご自身の経験から、「辞書で扱う方言の用例や漢字の読み」「音」「訓」「方言読み」があり、地名の表記の仕方は同じでも、地方によって読み方が違う。また、同じ道具でも地方によって名前が違うことがあるが、今日の日本語を正しく反映する辞書を作りたいという思いから方言項目を積極的に収録した」とお話しくささいました。

活発な質疑応答も行われ、自分と方言とのありかたを考える一日となり、大変有意義なフォーラムとなりました。



「山形学」フォーラム「どっこい方言は生きている」

コーディネーター：加藤大鶴氏（跡見学園女子大学文学部准教授）

講師：柴田徹氏（NHK山形放送局シニアアナウンサー）、佐藤和之氏（弘前大学人文社会科学部教授）、神永暁氏（元日本国語大辞典編集長）

場所：遊学館2階 遊学館ホール

日時：平成30年6月30日（土）13：30～16：30

参加者：157名

☆平成30年度「山形学」フォーラム及び講座は、全講座終了後に内容をまとめ、講座録「遊学館ボックス」として発刊いたします。これまでの講座も冊子にしており、販売しておりますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。